

2020
9月15日(火)
ただいま

ALSを生きる

京都・嘯託殺人事件が
問い掛けること

読者からの反響

者の姿を伝えた連載「ALSを生きる 京都・嘯託殺人事件が問い掛けること」。読者からは記事に自身の体験を重ね、心を寄せる声が多く寄せられた。その一部を紹介する。(田中美千子、衣川圭)

■生死を分ける決断を巡って

消えぬ迷い。大事な人と生きた証し

全身の筋肉が薄く細くして、くわしき腰をすくむ力が弱まれば人工呼吸器を着けるかどうかが迷った。平成11年(1999年)、平松さんは毎月のように広島の握手を往復し、実家へ帰ると妹で二人で4年間の闘病を支えた。

埼玉県に連れてきてもらった平松さんは、76歳で発症。1年後、ALSと診断された。平松さんは毎月のように広島と握手を往復し、実家へ帰ると妹で二人で4年間の闘病を支えた。

別のもつて呼吸器を装着するかどうかの選択を迫られた人だ。50歳でALSを発症した平松さんは、16年前、8歳の長女と妹を連れて亡くなった。不妊治療の末に授かった

頭の痛みはなく、平松さんは「介護から解放された」として母の決断に「はあ」とうたった。しかし、人工呼吸器を着けたいなら、「呼吸器を着けたい」と頼める母は、今も生きていたのではなかった。自らも同じ病に苦しんでいた。

母の死後、妻の引き出しから平松さんに残した遺稿が見つかった。おりがうたった。メッセージに「二人、この間に用意したのだから、強い覚悟を感じた。」「母は、精神的な苦しみで亡くなった。だから、ALSの女性に薬物を投与して、京都府書に遺棄された医師たちを許さないと、本人が死ななすべし、人の気持ちをなすべし、誰かの『大事な』の命を奪う行為は絶対だ。認めさせてほしい。」「不妊治療の末に授かった妻

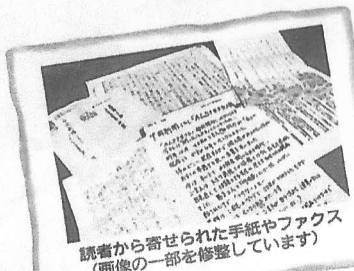


平松さんの形見の指輪と遺稿を前にする平松さん。最期の日々を振り返る。(編集・高橋野由)

広島県東城町(現庄原市)の農家に1943年、私は5人きょうだいの末子として生まれた。今は過疎化が著しい地だが、当時の中学校は1学年6クラス、1クラス約40人と子どもが多かった。

55年前の青春

1965年、就学する岡山の紡績会社は定時制高校が併設されていたので、そこへ勉強ができていく期待があった。1時から、夜、同じ敷地の高校で学んだ。私は国語を履修した。感想文を書いた時、「そんな書き方があるのか。素晴らしい」と先生に褒められてきたのが嬉しかった。寮には100人ほど、10人部屋、山崎、田丸、九州の名手が飛び交った。「不思議な歌ね」と言われた「鹿児島県民」の歌を知っていた。青春時代、思えば、目が潤む。

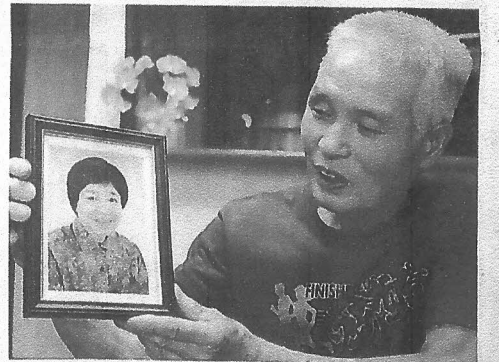


読者から寄せられた手紙やファクス(画像の一部を修整しています)

■安楽死への思い

命は本人のもの。選ぶ自由がほしい

京都の事件の被害者の女性が続いたのは、自身の意思で人生を終えたい。安楽死は是非が非か社会に持ち込まない、人命軽視につながるおそれ、という懸念から、安楽死の法制化には肯定的な意見も多い。しかし、遺族を悩んだALS患者の遺族たちからは「議論を進めてほしい」との声が相次いだ。



「がんばってるよ。ありがとう」。文子さんの写真に語り掛ける加藤さん(安佐北区)

本人も家族が納得する最期の、安楽死を認めてほしい」とうたったのは、広島市安佐北区の加藤さん(69歳)。3年前、ALSを患った妻文子さん(当時71)を自宅に亡くした。1年半の闘病生活では、死なせてくれたらと妻が訪問診療の医師に頼んだことがあった。家族には一度も口にしたことがない。加藤さんは、掛ひいひいという状態になった。食事、排泄、入浴が耐えられなくなった。自力で何もできない状況が、妻は「口から食入されなくなった。胃は詰まった。人生を楽にしてもいい前向きに闘病する人もある。加藤さん」

安佐南区の主婦(71)も、安楽死の法制化の議論を求めている。7年前、自身が乳がんを患い、強死を志した。抗がん剤治療中は入浴もできず、トイレもできない状態に陥った。家族の断言が、本人の意思はあったが、キチンと死なせてほしいと自由を求めたい。現実的な議論が必要だ。始めの時は、自分で決断してほしい。

産地はん × イマナ!
きょう放映

きょう午後2時55分から始まるRCCテレビの情報番組「イマナ!」の料理コーナー「楽うまクッキング」で、9月の食材のピオネを使ったレシピ「ピオネのせりーパフェ」を紹介します。

◇お断り 連載「ひろみお兄さんの親子体操」は休みました。